

ヤマト政権の確立に関わった古墳時代のイナ谷 (古墳時代中期 5 世紀から 400 年間の様相を探る)

第 1 回時の駅講座
令和 4 年 7 月 9 日 (土)
小林 正春

はじめに

古墳時代中期以降の我が国における古代国家であるヤマト王権が確立し不動な位置づけとなって行く過程において東国シナノの南端部に位置する当地域伊那谷がどのように関わったのかを考えてみる。古墳時代中期突如前方後円墳を複数築造する実態、続く古墳時代後期の様相、さらに律令の時代における地域像及び官道東山道についてなどを整理してみる。

弥生時代の我が国と伊那谷

弥生時代、稲作の伝播・普及及び金属器の伝来によって日本列島の様相が一変した。九州・中国・近畿・東海地方のいくつかのエリアを核として小国家が分立し、規模は小さいがそれぞれが独立あるいは連携して政治・経済活動を展開した。

いわゆる『三国志』魏書東夷伝倭人の条（以下魏志倭人伝）に記された邪馬台国をはじめとする百余国の存在である。中国魏との関係で邪馬台国が重要な位置にあったことは言うまでもないが、その所在地については九州説・大和説と先学の研究も多様であり、学界における結論は見出されていない。先学の諸研究においても結論は容易ではないが、個人的には信濃の伊那郡に住まう身として、大和説に気持ちが傾くところである。

なお、百余国の実態は魏志倭人伝に記された内容及び各地で実施された遺跡発掘調査の結果から様々な論及がなされている。

当然のことではあるが、魏志倭人伝に伊那谷に関する記述はなく、もっぱら遺跡の発掘調査の結果を勘案する以外に術はない。当地域における邪馬台国の時代すなわち弥生時代後期の実像としては、座光寺原式及び中島式土器と呼称する単純かつ精緻な櫛画文を施した土器と、独特な形態の打製石器群で構成される文化圏の存在がある。

その分布範囲は、伊那谷全域に及ぶが上伊那の北半部は若干異なる様相も示している。いずれにしても座光寺原式・中島式土器の分布エリアが一つの圏域としてくくられることは間違いなく、当時の小国家の一つ「イナ国」を想定することも意味容認されよう。

しかし、弥生時代の主要な生業である稲作についてはその生産基盤である水田面積が限定されたものであり、収穫高についても限定的であり、余剰生産物の確保にまでは至らなかった地域事情が読み取れる。その具体的状況を判断する材料の一つに金属製品の出土量が極めて少なく、物々交換による交易が限定的であった結果と考えられる。

一方、この時代北信濃の千曲川流域にあっては、赤色塗彩された多様な櫛画文による吉田式・箱清水式土器の分布エリアが広範に広がり、伊那谷とは別の小国家が想定される。

また、外来の金属製品についても中野市柳沢遺跡の銅戈・銅鐸の青銅器類に代表される多様な品々が出土しており、地域外へ余剰生産物の供給可能な中、盛んな交易がおこなわれていた可能性が高い。

なお、伊那谷と千曲川流域の中間に当たる松本平及び諏訪圏域においては、箱清水式土器及び中島式土器の影響のもとで若干様相の異なる土器群があり、この分布エリアにもまた小国家の存在を想起するものといえる。

また、隣接地に当たる東海地域には広範な沖積平野を生産基盤としてオワリ・ミノにかけて中山式・欠山式土器の大きな文化圏を形成している。赤塚次郎氏は続く時代のはざましき廻間式土器をめぐる

研究から百余国の一つ 狗奴国^{ぬこく}を比定している。東海圏域を統括した集団が次時代の古墳時代においてシナノの各地に強い影響を与えることとなる。

弥生時代後期にシナノの各地域に形成された集団はその延長上に、それぞれが連携もしくは従属関係を結び、より広範な古代国家の構成要素を形成して行く事となる。

ヤマトの初期国家の時代（古墳時代前期）

桜井市 纏向^{むすむす}遺跡の発掘調査によって弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけての大型の建物が発見され、わが国最初の宮殿と都市の存在が推測されている。

纏向遺跡からは大和盆地で伝統的に作られた土器のほかにも中国地方・北陸地方・東海地方で作られた土器も多数出土し、少なくとも本州の一定エリアを網羅した集権的な性格を確保した集団（豪族）の存在が読み取れる。また、隣接して初現形態の前方後円墳ともいえる纏向古墳群があり、まさに、ヤマト王権の始動が窺える。

纏向古墳群に続き、卑弥呼の墓ともいわれる箸墓古墳さらに桜井茶臼山古墳や天理市の^{おおやまと}大和古墳群が次々と築造されヤマト王権が確立した姿を読み取ることができる。

一方、この時代纏向遺跡に土器を供給した東海地方の様相は濃尾平野の各所に前方後方墳の築造が連続し、大和の前方後円墳築造の姿と一線を画している。前方後方墳という墳墓形態の統一がヤマト王権にすべてを委ねるのではなく、独立した圏域としての強い意志が窺われる。さらに言えば、赤塚次郎氏が想定した邪馬台国の時代の狗奴国の中枢勢力が継続し、圏域を統括しながらもヤマト王権と連携関係にあった可能性が高い。

翻って、シナノに目を向けると前述の弥生時代に土器様相で3地域に文化圏の認められたいずれにおいても初期の古墳築造は前方後方墳である。

南信の伊那谷に於いては松尾代田山狐塚古墳・同羽場獅子塚古墳・伊賀良笛吹2号古墳、中信の松本平には弘法山古墳、北信は長野市篠ノ井の姫塚古墳・飯山市勘助山古墳他があり、いずれもそれぞれの圏域においても古墳の初現期に築造されたといえる。これらの古墳築造に当たっては東海地方の勢力と強い繋がりのあったことは首肯される。

当地域の前方後方墳3基の内2基が松尾地区内に、笛吹2号古墳のみが伊賀良地区に所在するが、松尾と伊賀良地区は地区単位でとらえると県境を挟み一定の距離を置くが地形的には連続し、後の古墳時代中・後期の古墳分布状況から見ると飯田古墳群における松尾単位群の範疇と捉えられる。

代田山獅子塚古墳は松尾地区上位段丘にあたる代田山段丘面の東端部に東方に広がる代田・毛賀の中・低位段丘を見下ろす位置に築造されている。

羽場獅子塚古墳は松尾上溝の中位段丘東端部の下位段丘面を見下ろす段丘端部に築造され、段丘規模は代田山狐塚古墳の比ではないが同様の立地条件にある。

笛吹2号古墳は松尾地区上位段丘から微地形の変化はあるが西方にほぼ連続する高位段丘上にある。また、飯田松川右岸の県境地区を見下ろす高位段丘北端部に位置し、前2者と共通した立地といえる。

代田山狐塚古墳と羽場獅子塚古墳については出土品による築造時期の特定ができないが、笛吹2号古墳の周溝内からは多くの土師器が出土しており、それらから4世紀代、新しくてもその中頃に築造されたものと判断される。また、竜丘から座光寺にかけての集落遺跡からは東海地方からもたらされた土師器類が一定量出土しており、古墳以外にも東海勢力との繋がりの深かったことを物語っている。

シナノの前方後方墳の時代は概ね4世紀中頃に終息し、北信エリアでは前後して前方後円墳の築造がなされた。具体的には千曲市の森將軍塚古墳・長野市篠ノ井の川柳將軍塚古墳などである。千曲川氾濫原の肥沃な土壌を活用した稲作が大きな背景として挙げられる。

この時代（古墳時代前期から中期前半頃）、大和の大型古墳の築造位置は天理市や桜井市の前期

前半期の古墳群から盆地の北側奈良市の北西部、奈良丘陵の南西斜面の佐保川西岸に当たる佐紀の地に所在する佐紀盾列古墳群に移動する。長さ200mを超える大型前方後円墳の多くはヤマト王権の王墓と考えられる。これらの古墳被葬者である大王と強く関連したのが千曲川流域の前方後円墳に葬られたシナノの王であり、ヤマト王権との関りを強化した結果として5世紀中頃まで前方後円墳を継続して築造することができたといえる。

一方、中信の松本平、南信の伊那谷共に古墳時代前期から中期前半にかけてヤマト王権と直結する前方後円墳の築造は行われていない。まさに千曲川流域がシナノの中心としてヤマト王権下での地位を確立し、5世紀半ばまでの100年余の間隆盛を誇ることとなり、中信エリア・南信エリア共に周辺的な存在として、ヤマト王権からの認識も低かったといえる。

馬がもたらした伊那谷の黎明

一古墳時代中期(5世紀)伊那谷の夜明け一

古墳時代中期後半になるとヤマト王権の主要な墓域が大和盆地を離れ、生駒山を超えた大和川下流域の河内平野へと移動する。大阪府堺市・羽曳野市・藤井寺市一帯に巨大古墳が累累と築造された。世界遺産登録されたわが国最大の長さ486mの大山古墳(仁徳天皇陵)・わが国2番目の規模であり長さ425mの菅田御廟山古墳(応神天皇陵)などに代表される百舌鳥・古市古墳群である。

百舌鳥・古市古墳群に葬られた大王は中国南朝の国々に朝貢し、宋の歴史書である『宋書』倭国伝・夷蛮伝や晋書・南齊書・梁書に記録が残されている。413年から502年までの間に5人の大王が朝貢した記録で、順番に讚・珍・濟・興・武である。教科書などでは倭の五王と一括して表現される。

倭の五王が歴代天皇(大王)の誰に該当するのかは古事記・日本書紀の記録などから様々に検討されてきたが、最後の武が雄略天皇とする点で大方の一致をみているが、それ以外には結論が見出されていないのが現実である。一例をあげるならば、讚=仁徳・珍=反正・濟=允恭・興=安康・武=雄略とする考え方がもっとも一般的である。いずれの天皇も5世紀代に在位期間があるとされている。これらの天皇の陵として比定されている古墳が百舌鳥・古市古墳群である。

大和盆地から大阪湾岸に墓域を全面的に移転していることから宮都も移転したはずであり、王朝交代説なども提起されているが、定説にまでは至っていない。しかし、当時の中国や朝鮮半島の情勢やそれらとの関りの中でヤマト王権の中枢に大きな変革があったことは否定できない。

大王墓の移動という政策的な変動の背景には中国以上に朝鮮半島との関りが大きく、当時の高句麗・百濟・新羅の3国が半島の覇権を争う中(朝鮮三国時代)、倭国(ヤマト王権)もまた半島進出を何度も繰り返していた。

ヤマト王権が半島進出を繰り返す目的は、中国の先進的な文物や様々な技術を確保することが必要であり、それを隣接地域にあって自国の物として新たに文化形成していた朝鮮半島からの接受を目的とした。多くが平和裏での交渉であったと思われるが、時として武力での侵攻も行いつつ、新しい文化をわが国にもたらしことを念頭にしていたと考えられる。

そうした朝鮮半島との交易と抗争はある意味緊張関係にあったことも否定できず、海を越えて高句麗・百濟・新羅の軍団の来襲も視野に入れての、王権中枢の大阪湾岸進出がなされた可能性が高い。なお、海から見上げた巨大古墳の様は、抗争でなくとも平和裏の交易に来訪した半島の人々に倭国(ヤマト王権)とその大王の権力の大きさを誇示することも意図されたともいえる。

ちなみに、この時代半島からもたらされた新しい技術には、土木技術・金属製品加工技術・製陶技術・牛馬及びその生産技術等である。それらはいずれも、ヤマト王権にとって権力の強化や人心支配、さらには列島全体の掌握に大きな役割を果たすこととなった。まさにヤマト王権が絶対的な存在となって行く姿を彷彿とさせる。

大和盆地から河内平野へヤマト王権の中枢が移転した5世紀、シナノの地にあってもまた大きな変革が認められる。

古墳時代の中頃、馬生産の隆盛によって、列島の社会状況は中央集権へ加速した。その一翼を担った伊那谷は、後の大和朝廷の確立にも大きく係わり、東国経営の拠点としての姿を様々な事象から読み取ることができる。

古墳時代前期（3～4世紀）の伊那谷はシナノの中でも後進性の強い土地柄で、北信地域に從属した様相がある。その伊那谷に、5世紀の中頃突如として前方後円墳をはじめとするたくさんの古墳が造られる。古墳の築造開始はそれまでの後進性・從属性のすべてを払拭しシナノの中心として伊那谷が表舞台に登場することとなる。長野県内に50余基ある前方後円墳の約半数にあたる23基の前方後円墳が、飯田市を中心に5世紀から6世紀にかけて造り続けられ、飯田下伊那の古墳の総数は700基ほどが築造された。

馬が国家を造った

我国の弥生時代の記述で著名な「魏書東夷伝倭人の条」（魏志倭人伝）に当時倭国では牛・馬の飼育が行われていないことの内容がある。事実、考古学の発掘成果を見ても弥生時代から古墳時代の前期に馬に関する資料は見あらず、牛馬の存在が発掘資料の中で確認されるのは、4世紀の終わりから5世紀である。その頃になって初めて、朝鮮半島から牛馬とその飼育技術が伝えられたことが明らかになっている。

当時の我国は、朝鮮半島から様々な文物・技術を受容し、それを背景に国家としての姿を具体的に整えて行く課程があり、その象徴的な一つとして馬の輸入があり、もっといえば馬の活用が大きな社会変化をもたらし、馬を抜きにして古代史を語れないともいえる。

当時の馬は、今でいえばトラックであり戦車であり、乗用車であった。馬の保有数に勝った豪族が大和政権の中枢を担い、後の大和朝廷成立に大きく関わったといえる。

全国屈指の馬産地 ―ヤマト王権中枢と直結した土地―

4世紀まで後進地として、甘んじていた伊那谷が5世紀中頃からクローズアップされるに至ったのは、その馬の飼育生産の拠点として位置づけられたこと以外には考えられない。早くから、伊那谷の古墳からはたくさんの馬具が出土していることが知られており、諏訪市の故藤森栄一先生はその著述の中で、ホースマーチャントの古墳であると述べられている。1980年以降、飯田市での発掘調査により、その実体がより鮮明になってきている。飯田市座光寺・上郷・松尾の5世紀代の古墳に関連して古墳時代の馬の歯・骨が発見され、その数は28例にもなる。端緒となったのは座光寺新井原12号古墳に関連して発見された馬のお墓で、馬の骨とともに、5世紀の後半に見られる典型的な轡・杏葉などの馬具が伴って出土し、飾り馬の埋葬例として全国から注目された。

その後、座光寺・鼎・松尾・上郷地区の5世紀代の馬28頭は全国屈指である。県単位で見ても20頭を超える5世紀の馬が発見されているのは現状で飯田古墳群エリアのみといえる。すなわち、5世紀の伊那谷は、我国最大の馬生産地で、その供給地としてヤマト王権の中枢と深い関わりを持った国家の要衝ともいえる。

馬生産を背景にした古墳形態の違い

馬生産及びその供給によってヤマト王権と直結した伊那谷南部の5世紀代の墳墓形態は前方後円墳・帆立貝式古墳・円墳・方墳・方形周溝墓・円形周溝墓と多様性に富んでいる。

前方後円墳は北から上郷地区の溝口の塚古墳、松尾地区の茶柄山3号古墳・御射山獅子塚古墳・水城獅子塚古墳代田獅子塚古墳の4基、竜丘地区の権現堂1号古墳・丸山古墳・大塚古墳・兼清塚古墳・塚原二子塚古墳の5基、計10基である。

帆立貝式古墳は座光寺地区の新井原12号古墳、松尾地区の八幡山古墳・竜丘地区の塚原3号古墳・鏡塚古墳・鎧塚古墳の3基、計5基があり、他に松尾地区妙前大塚古墳、竜丘番匠塚古墳・

権現2号古墳等もその可能性が考えられる。

円墳は各地区に存在する。

墳墓形態の違いは、前方後円墳を筆頭に帆立貝式古墳・円墳・方墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土葬墓があり、その形態さと規模の違いはそれぞれに埋葬された人物の階級差もしくは序列を示している可能性が高い。

古墳時代後期（6～7世紀）—多様な横穴式石室はさながら博物館—

6世紀以降の古墳時代後期、古墳への埋葬形態が大きく変化し、それまでの竪穴式石室から朝鮮半島の影響を受け、古墳の中腹に入口部を置く横穴式石室の埋葬施設となる。

飯田古墳群の横穴式石室はその形態が多様で、4ないし5つくらいに類別され周辺の複数地域からの影響のもとで構築されたと推測される。また、古墳時代後期の中でも時代によって横穴式石室の形態は異なりを見せる。

1) 半島との関りが考えられる石室

6世紀前葉の座光寺高岡1号古墳や畦地1号古墳・北本城古墳の石室は、竪穴式石室から横穴式石室に移行する状況を示す横穴式石室で、座光寺以外では見つかっていない。この石室の形は、国的にも珍しく時代的に整合するのは国内では北部九州の田川市に1例、他には朝鮮半島の大邱市周辺（かつての伽耶国）にみられるものである。

また、畦地1号古墳から発見された銀製の耳飾りは半島からもたらされたもので、当時座光寺かいよいよ半島と深い関りのある人々が生活していたと判断される。

2) カミツケノ（群馬県）西域との関連が考えられる石室

上郷の飯沼天神塚古墳は飯田古墳群の中で最大規模（約76m）の前方後円墳であるが、天井石以外は比較的小型の石材を用い、細長い入口通路（羨道部という）と遺骸を安置した部分（玄室という）で構成され飯田古墳群で唯一の形態ですが、その形は群馬県の西域地方のもの（例えば安中市の梁瀬二子塚古墳）と極めて類似点が多く関連性が指摘されている。

また、この亜流とも考えられるのが松尾姫塚古墳と竜丘金山二子塚古墳の石室で、比較的小型の石材で側壁・奥壁を構築し、石室内を赤色塗彩するものである。

3) オワリ・ミノ（愛知・岐阜県）との関連が考えられる石室

松尾の上溝天神塚古墳・竜丘の御猿堂古墳・馬背塚古墳後円部の石室など当地方で最も多い石室の形である。古墳時代後期において地理的条件も含め、畿内と結ぶ地域として強い関連があたことを示すと考えられる。

4) ヤマトとの関連が考えられる石室

6世紀後半から7世紀初頭にかけて、松尾のおかん塚古墳・竜丘の馬背塚古墳（前方部石室）・塚越1号古墳の羨道部と玄室部が明瞭に区切られ巨大な石材を持ち石室規模も極めて大型のもので、ヤマトの石舞台古墳などに類似するものである。

代表的なものを挙げてみたが、このように横穴式石室野形態が複数認められるのは全国的にみてもこの地域の特色といえ、このことから『飯田は古墳の博物館』と呼称している（正確には横穴式石室の博物館）。

馬が東山道のルートを決める

5世紀以後、東国は常に都への馬供給地として国家プロジェクトの主施策を担い続けた。6世紀以降東国各地に馬産地が拡大し、東国産の馬のほとんどはこの伊那の地を通して兵とともに畿内に向かい、その実体を反映して律令の官道『東山道』が、わざわざ神坂峠（木曾山脈）越えの伊那谷遡上ルートとされたといえる。

神坂峠を越えた後、急坂を下り神坂神社・園原の里を経て阿知川右岸を辿り、再び峠道「網掛峠」を越え智里の大垣外遺跡に至る。そこから阿知川まで下り駒場手前で渡河、会地の駅家に到達する。会地の駅家は阿布知神社の東側「木戸脇」一帯と考えられている。会地の駅家は駅馬3

0頭が配備され、東山道の通常の駅家に配備された駅馬10～15頭を凌駕し、神坂越えの厳しさを物語っている。

会地の駅家を過ぎた後のルートは諸説あり、西部の山麓際を北上し山本・伊賀良に向かう道筋。駅家から東に向かい中原遺跡（阿智高校所在地付近）を経て飯田市箱川を経由して三穂に至る。三穂に至る道筋も複数が考えられている。立石・下瀬・川路をたどる道。立石・伊豆木・久米を経て川路への道。山本からも上川路に向かう複数の道筋。伊賀良から天竜川沿いに至る経路は竜丘地区桐林・駄科へ、鼎を経て松尾地区へ向かうなど複数のルートが飯田松川の渡河地点を目指すこととなる。松川の渡河地点手前に当たる松川右岸のいずれかに育良駅家が存在したこととなる。育良駅家の所在地の特定はできないが、伊賀良か松尾のいずれかに所在したはずである。官道である東山道の大きな役割は、安全かつ確実に文物と人（公的な文書や役人）を移動させなければならず、ルート上最も大きく急流といえる松川越えは河床の浅くなった天竜川合流地点付近に求めた可能性が高い。

松川渡河後の東山道は大きく山麓沿い上段の道、下段の天竜川に近い低位段丘上の道が考えられる。古墳・遺跡の実態に加え、前段で記した通り松川渡河地点の位置、さらには伊那郡衙所在の恒川遺跡経由は必定であり、もっとも有力な道筋は下段のいずれかに求めることができる。

上郷地区のルートは松川渡河地点（育良駅家）から伊那郡衙（恒川遺跡群）を直線が結ぶことのできる位置で、小規模な段丘に起因した湧水帯の直近を通過したことが考えられる。また、遺跡の状態で見ると土曾川を挟みほぼ連続する上郷の堂垣外遺跡・座光寺の五郎田遺跡の中もしくはその直近を通過していたはずである。

第3の都候補地”伊奈”

国家の要衝として具体的事象の一つを上げると、下市田・座光寺から発見された**富本銭**は、時の天皇天武による第3の都候補地を証明する可能性がある。馬と兵の供給により壬申の乱で大海人皇子軍勝利に果たしたこの地の役割の大きさ故と考えられ、ちなみに、信濃の国伊那郡衙は座光寺の恒川遺跡にあり、東国一帯の兵馬を掌握していた可能性が高く大和朝廷の東国統治に極めて重要な役割を果たしていたと考えられ、東国及び伊那谷産の馬が国家形成に大きく寄与し、その馬たちが古代の伊那谷に大きな光明をもたらしたといえる。

参考

東山道：五畿七道の一つ。近江の国大津から奥羽の国まで至る官道。また、そのルートにある国々の範囲（近江・美濃・信濃・上野・下野・常陸・…出羽・奥羽）

壬申の乱：天智天皇崩御後の皇位継承争い。天智天皇の子息である大津皇子と天智天皇の弟である大海人皇子による抗争。当初大津側が優勢であったが、東国の兵が大海人側に加担したことで形勢逆転、大海人側が勝利し、天武天皇として即位。

富本銭：天武天皇による藤原京造都に関連して飛鳥池の工房で鑄造された貨幣。「和同開珎」に先行するもので唐の制度に倣い貨幣経済の立脚を目指した。その後の皇朝十二銭発行も都づくりと連動している

日本書紀第28卷：天武元年6月丙戌（ひのえいぬ）26日

山背部小田・安斗連阿加布（あどのむらじあかおび）を遣わして東海（うみつち）の軍を發す（おこす）。又、稚桜部臣五百瀬（わかさくらべのいおせ）・土師連馬手（はじのむらじうまで）を遣わして東山（やまのみちの）の軍を發（おこ）す。

※釈記所引私記の引く安斗智徳日記（あどのちとこにき）には「令レ發ニ信濃兵一」とある

〈「釈日本義紀」：鎌倉末(1274～1301)頃完成した「日本書紀」の注釈書。著者卜部兼方〉

日本書紀第29卷：天武12年12月17日

又詔曰、凡都城宮室、非一處必造兩參、故先欲都難波。是以、百寮者各往之請家地。（また、み

ことのりしていわく、およそみやこ・おおみやひとところにあらず、かならずふたところみところつくらむ)

十三年春正月甲申朔庚子、三野縣主・藏衣縫造二氏賜姓曰連。丙午、天皇、御于東庭、群卿侍之。時召能射人及侏儒・左右舍人等射之。二月癸丑朔丙子、饗金主山於筑紫。庚辰、遣淨廣肆廣瀨王・小錦中大伴連安麻呂及判官・錄事・陰陽師・工匠等於畿、令視占應都之地。是日、遣三野王・小錦下畝目臣筑羅等於信濃令看地形、將都是地敷。三月癸未朔庚寅、吉野人宇閉直弓、貢白海石榴。辛卯、天皇、巡行於京師而定宮室之地。乙巳、金主山歸國。

壬辰、三野王等、進信濃國之圖。丁酉、設齋于宮中、因以赦有罪舍人等。乙巳、坐飛鳥寺僧福楊、以入獄。庚戌、僧福楊、自刺頸而死。

富本錢發行前後の歴史事象抜粋：

- | | | | |
|------|-------|---------------|---|
| 大化元 | 6 4 5 | 大化改新 | 中大兄皇子・中臣鎌足 vs 蘇我入鹿 |
| 天智2 | 6 6 3 | 白村江の戦い | 倭・百濟 vs 唐・新羅 |
| 天智3 | 6 6 4 | 唐使拒否 | 対馬・壱岐・筑紫に防人・烽火台 太宰府防衛の水城を築く |
| 天智4 | 6 6 5 | 百濟百姓4 0 0 余人 | 近江国神埼郡に
長門国の城・筑紫国大野城・椽城（きいのき）を築く |
| 天智5 | 6 6 6 | 百濟男女2 0 0 余人 | を東国に |
| 天智6 | 6 6 7 | 大津宮遷都 | 大和国高安城・讃岐国屋嶋城・対馬国金田城築く |
| 天智7 | 6 6 8 | 中大兄即位（天智天皇） | 唐・新羅連合軍高句麗を滅ぼす 半島統一 |
| 天智8 | 6 6 9 | 百濟の男女7 0 0 余人 | を近江国蒲生郡に |
| 天智10 | 6 7 1 | 天智没 | |
| 天武元 | 6 7 2 | 5月近江朝廷 | 天智陵墓造営のため美濃・尾張の人夫を徴発・武器携帯
6/24大海人皇子吉野脱出 東国へ 夜半伊賀国へ ※壬申の乱勃発
6/25伊勢国へ 不破の道を塞ぐ
6/27尾張の国守大海人皇子側につく 近江朝廷側動揺 |
| | | | 東海・東山道の兵が連動 |
| | | | 信濃の国（伊奈）の兵馬も加わった可能性が高い |
| | | 7/2 | 大海人皇子勢 美濃から近江・大和へ |
| | | 7/22 | 近江軍瀬田にて大敗 |
| | | 7/23 | 大友皇子自殺 |
| | | 9/15 | 大海人皇子大和に入る
飛鳥浄御原宮造営 |
| 天武12 | 6 8 3 | 4/15 | 銅錢を用い銀錢を禁じる
富本錢鑄造——飛鳥池遺跡 無紋銀錢
新都（藤原宮）造営と貨幣発行が連動 |
| | | 4/18 | 銀の通用は許す |
| | | 12/17 | 副都制実施 難波宮造営 |
| 天武13 | 6 8 4 | 2/28 | 広瀨王らを畿内に、三野王らを信濃に造都候補地の視察
伊奈の富本錢2枚はこの時持ち込まれたものか |
| | | 4/12 | 三野王ら信濃国図を献上 |
| 天武14 | 6 8 5 | 9/15 | 東海・東山・山陽・山陰・南海・筑紫の諸道に使いを派遣 政治・百姓の状態を視察させる
10/10 東間温湯行幸のためか信濃に行宮造営
行宮の場所は要検討——伊奈の内であることも視野に |

朱鳥元		1 / 1 4 難波の宮全焼
		9 / 9 天武没 皇后うののさららの皇女称制
持統4	6 9 0	1 / 1 持統即位
		12/19 藤原の宮地を觀る
持統6	6 9 2	5 / 2 3 藤原宮地鎮祭
持統8		3 / 2 大宅麻呂らを鑄錢司に
		この時の貨幣も富本錢か
		1 2 / 6 藤原宮に遷都
文武3	6 9 9	1 2 / 2 0 鑄錢司を置く
		この時の貨幣は和同開珎か
		新都（平城宮）造営と貨幣発行が連動
大宝元	7 0 1	大宝令
和同元	7 0 8	2 / 2 催鑄錢司
		平城に新都造営を詔す
		5 / 1 1 銀錢和同開珎を用いる
		8 / 1 0 和同開珎を用いる
		座光寺恒川遺跡出土和同開珎銀錢
和同2	7 0 9	1 / 2 5 銀錢の私鑄禁
		8 / 2 銀錢を廢止
		9 / 2 6 藤原房前東海・東山2道を巡察
和同3	7 1 0	3 / 1 0 平城遷都
		9 / 1 8 再度銀錢を禁ず